令和６年　度若手教員研究助成経費　成果報告書

所属名	総合教育系　特別支援教育部門
研究課題名	学校図書館における読書バリアフリー推進モデルの構築に関する研究
研究課題概要	**【問題の所在と目的】** 　令和元年に施行された読書バリアフリー法は読みに困難のある人々に対して、アクセシブルな電子書籍等が提供されることを基本理念としている。 読書バリアフリー法で規定されるアクセシブルな電子書籍等にはマルチメディアDAISY図書が含まれている。今後、読書バリアフリー法の理念に則り、読みに困難のある児童生徒に対して、地域の図書館や児童生徒に対して最も身近な学校図書館がマルチメディアDAISY図書等を含む音声図書をさらに提供し、支援することが求められる。 　本研究では、読みに困難のある児童に対して、学校図書館においてマルチメディアDAISY図書等を含む音声図書を提供し、学校図書館における読書バリアフリー推進モデルを構築することを目的とする。 **【方法】** **１．対象**：A市の小学校５校の学校図書館であった。 **２．実施内容** **①実施日数**：小学校５校の学校図書館に計14日間訪問し（１校あたり２日～３日）、児童らに対して音声図書の提供を行った。 **②支援者**：音声図書の専門家である金森裕治（元大阪教育大学）、福井喜章（大阪府立八尾支援学校）の２名であった。 **③提供図書**：提供した音声図書は、令和３～５年度文部科学省事業「読書バリアフリーに向けた図書館サービス研修」（研究代表者：今枝史雄）で製作したマルチメディアDAISY図書20冊であった。製作した図書の選定は学校司書の先生方とともに行った。 　①「うんちレストラン」（ポプラ社） 　②「ニーハオ！ふたごのパンダ」（ポプラ社） 　③④「むしをたべるくさ」　ポプラ社　肉声・人口音声 　⑤「パンどろぼう」（KADOKAWA） 　⑥「パンどろぼうVSにせパンどろぼう」（KADOKAWA） 　⑦「おしりたんてい　むらさきふじんのあんごうじけん」（ポプラ社） 　⑧「みえるとかみえないとか」（アリス館） 　⑨「字のないはがき」（小学館） 　⑩「ハロウィンドキドキおばけの日」（みらい） 　⑪「おさるのジョージとしょかんへいく」（岩波書店） 　⑫「ひらがなにっき」（解放出版） 　⑬「にげてさがして」（赤ちゃんとママ社） 　⑭「きたかぜとたいよう」（岩崎書店） 　⑮「せかいでさいしょにズボンをはいた女の子」（光村教育図書） 　⑯「富田林民話」（富田林民話研究クラブ） 　⑰「ホンの言葉のおくりもの（小学校版）」 　⑱「ホンの言葉のおくりもの（中学校版）」 　⑲「わたしたちの富田林」（富田林市教育委員会） 　⑳「わたしたちのくらし」（富田林市教育委員会） 　この20冊はA市小中学校の学校司書、中学校生徒らと大阪教育大学が共同で製作した図書であった。 **④提供方法**：小学校ごとに学校司書と連携の上、訪問日の「図書」の時間及び休み時間に提供した。大学からWindowsタブレット等を持参し、音声図書をインストールの上、児童らが閲覧した。今回、閲覧に使用したアプリは「ChattyBooks」であった。 **⑤備考**：児童の閲覧時に、学校司書や担任等から「読みに困難のある児童」が含まれていることを確認した。 **３．手続き** 　「図書」の時間の音声図書提供後に児童らにアンケートを実施した。アンケート内容は「１.マルチメディアデイジー図書を読んでみてどうでしたか？（５件法：とても楽しかった～全然楽しくなかった）」「２.マルチメディアデイジー図書は紙の本とくらべてどうでしたか？（「マルチメディアデイジー図書の方が読みやすい」「紙の本の方が読みやすい」「どちらでもない」という選択肢）」「３.もっとマルチメディアデイジー図書を読みたいと思いましたか？（５件法：とても思

	う～全然思わない)」と「感想」であった。５件法の２項目は「とても楽しかった・思う＝５点」～「全然楽しくなかった・思わない＝１点」とし、平均点と標準偏差を算出した。項目２はそれぞれの選択肢の割合を算出した。感想は主なものを列挙した。 **【結果・考察】** **１.閲覧の様子** 　小学校５校14日間で１年生～６年生までで児童延べ1033名が閲覧した。児童らは閲覧前にまず、大阪教育大学が作成した「楽しく読むために」というマルチメディアDAISY及び読み困難の啓発動画を視聴し、マルチメディアDAISY図書の有用性と読み困難の状態を把握した。スクリーンを使って、全体で図書を閲覧後、持参したWindowsタブレットを数名の児童が囲み、閲覧していた。読むスピードや文字の大きさ、背景色などを変更して、読み方を調整していた **２．アンケート結果** 　アンケートを記入できた２年生以上の児童501名を対象とし、記入漏れは分析対象外とした。「１.マルチメディアデイジー図書を読んでみてどうでしたか？」の平均点を算出したところ、4.53(±0.77)であった。「２.マルチメディアデイジー図書は紙の本とくらべてどうでしたか？」のそれぞれの選択肢の割合は「マルチメディアデイジー図書の方が読みやすい」は54%、「紙の本の方が読みやすい」は31%、「どちらでもない」15%であった。「３.もっとマルチメディアデイジー図書を読みたいと思いましたか？」の平均点を算出したところ、4.18(±1.01)であった。平均点からも、マルチメディアDAISY図書について好意的な印象が多く、また読んでみたいという印象が多かったことが明らかとなった。 　感想を見ると、「音声が出ることで読むのが難しい人にとって便利だと思った」などの肯定的な感想が多かった。今後の課題の把握のため、項目１及び項目３でネガティブな回答を行っている児童の代表的な感想を列挙すると「色や大きさなどはかえれて面白かった。もうちょっと本のしゅるいがあればいいと思った。」「パソコンでやるのはもじも絵もじっくり見たい。自分で読むほうがいい。」「特に不自由じゃない人は使わなくていいと思った。でも字の読みにくい人はこっちの方がいいと思った。文を読む早さと絵の表示時間の調整を分けた方がいい。」などが挙げられた（原文ママ） 　以上から、学校図書館における音声図書の提供を通して、多くの児童にとって、音声図書の啓発、読み方の違いがあることの啓発につながったと言える。しかし、マルチメディアDAISY図書の機能の今後の課題も明らかとなった。
研究課題の構成員	今枝史雄

※様式は頁数が増えても差し支えありません。